

つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 363号 2011.5.7 発行 社会政策研究所

社会保障と税の一体改革の進め方など協議 首相

日経新聞 2011年5月6日

菅直人首相は5日、与謝野馨経済財政担当相、細川律夫厚生労働相らを首相公邸に呼び、社会保障と税の一体改革の進め方などを協議した。12日の社会保障改革に関する集中検討会議では厚労省から社会保障案の報告を受ける予定。消費税率引き上げなどの財源を含む改革の全体像を6月に取りまとめるための議論が今後、本格化する。

窓口トラブル深刻化 各自治体が対応に苦慮

神戸新聞 2011年5月6日

近年、職場でのストレスなどが原因で心の病を発症する人が増えているが、労災や公務災害の認定は困難だ。阪神間の自治体の女性職員のように、市民の暴言を原因とした認定は極めて異例で、「前例のない画期的な判断」と評価されている。一方で、窓口職員と市民との間に深刻なトラブルもみられ、各自治体が対応に苦慮している。

民間労働者らによる精神障害などの労災申請は、2009年度で前年度比22・5%増の1136件、認定は同13・0%減の234件（厚生労働省まとめ）だった。また、神戸市を除く地方公務員の労災を受け付ける地方公務員災害補償基金兵庫県支部のまとめでは、精神疾患に関する06～10年度の申請は22件。認定はわずか4件にとどまっており、認定の難しさを示している。

兵庫教育大の岩井圭司教授（精神神経科）は今回の女性職員のケースについて、「心の病を認定した上、市民の暴言との因果関係を認めたことは評価される」とする一方、「市民の暴言や暴力で職員が精神疾患を発症することは今後もあり得る」と指摘する。

実際、自治体窓口での市民と職員のトラブルは深刻だ。例えば神戸市では、10年度（12月末まで）、市民や団体からの不当な要求や暴力は計38件に上った。具体的な内容は、職員のほほを平手でたたき、顔面につばをはきかけた▽電話で一方向的に「ヤクザを連れて殺しに行く」と暴言を浴びせた - など。今年4月には、中央区役所の男性職員が応対中の男にナイフで腹部を刺される事件もあった。

神戸のほか、尼崎市でも窓口で警察OBを配置するなど各自治体で対策を練るが、神戸市の担当者は「職員が心の病を発症する恐れはあり、トラブル後の心のケアも今後の課題」とする。

NPO法人ひょうご労働安全衛生センター（神戸市）の西山和宏事務局長は「窓口の職員が、同じような精神疾患となる可能性があり、今回の件は今後の認定にも影響するだろう」と話していた。

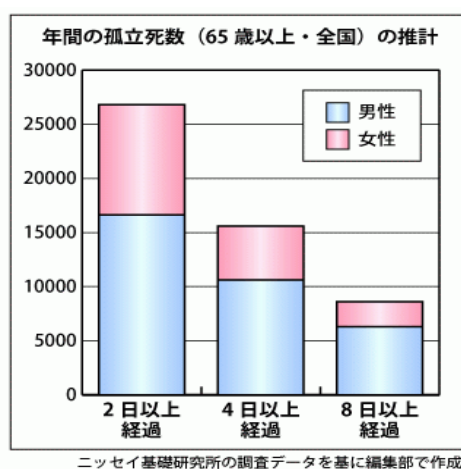
孤立死する高齢者「年間1万5千人超」 - ニッセイ基礎研究所が推計

キャリアブレイン 2011年5月6日

65歳以上の高齢者で、誰にもみとられずに死んでいく人は年間1万5000人を超える一。

ニッセイ基礎研究所はこのほど、孤立死する高齢者の年間推計数をまとめた。推計によると、孤立死を「死後4日以上経過して発見された人」と定めた場合、その数は1万5600人を超える可能性があるという。また、孤立死した事例の中には、生前に「セルフ・ネグレクト」（自己放任）状態にあったと考えられる人が約8割含まれていたことも明らかになった。

同研究所では、誰にもみとられず、自宅で死亡する高齢者の増加が問題視される一方、「全国で実際どのくらいの人孤立死しているのか、その数字すら明らかになっていない」（井上智紀研究員）点に注目。孤立死について、虐待や孤立などの専門家を集めた委員会での議論を経て、「自宅にて死亡し、死後発見までに一定期間経過している人」と定義した上で、「東京都23区における孤独死の発生数」（東京都監察医務院、2009年時点）と「人口動態統計」（厚生労働省、2010年版）を用い、東京23区における性・年齢階級別の高齢者孤立死の発生確率を算出した。さらに、その発生確率と全国市区町村の性・年齢階級別死亡数を基に、65歳以上の孤立死数の推計数を市区町村ごとに導き出し、合算した。



推計の結果、孤立死を「死後4日以上経過して発見された人」と定めた場合、その数は1万5603人（男性は1万622人、女性は4981人）となった。さらに、発見されるタイミングを「死後2日以上」と区切って推計した場合、その数は2万6821人（男性は1万6616人、女性は1万204人）に達した。発見されるタイミングを「死後8日以上」と設定した場合は、8604人（男性6311人、女性2293人）だった。

廣渡健司主任研究員は、「今回示した数字は東京都の発生確率を基に推計した数字だが、各自治体が高齢者の孤立死の実態を把握し、対策を練る上での参

考値にはなる」と話している。

■孤立死の8割がセルフ・ネグレクト状態

また同研究所では、各自治体の地域包括支援センターと生活保護課が把握している孤立死と思われる1068件の事例の情報を収集。このうち、「自宅にて死亡し、死後発見までに一定期間経過している人」という定義に合致する765件について分析した。その結果、「セルフ・ネグレクト」（飲食や最低限の衛生状態の保持、金銭の管理などをやろうとしないか、する能力がないため、安全や健康がおびやかされる状態）に該当していた人は約8割（609件）に達した。調査・分析を担当した山梨恵子研究員は「セルフ・ネグレクトは孤立死に至るリスクを負った状態であるといえる。こうした状況に対応するためにも、セルフ・ネグレクトを高齢者虐待防止法上で虐待と位置付けるなどの対応が必要なのではないか」と話している。

震災と障害者…心強い「福祉避難所」協定

読売新聞 2011年5月6日

いまま13万人以上が避難生活を送る東日本大震災。明日は我が身と考える方も多いのではないのでしょうか。

難病のお子さんを抱える大阪府東大阪市の男性（36）は、今回のような震災が起きたとき、どのようにすればいいのかを家族で話し合いました。「娘は避難時には何もできない。しかも、ちょっとしたことで泣き叫ぶため、避難所になじむのはどうも無理。結論は出ない。避難場所で、災害弱者への適切な誘導を行政に期待するしかない」とつぶやきます。

茨城県北西部にある大子町の主婦（50）は、足に障害があります。1995年の阪神大震災の時、夫と約束を交わしたそうです。もし災害が起きたときに車で逃げることで

きなかったら、自分を残して2人の子どもを連れて逃げてほしいと——。夫とは口論になり、ようやく納得してもらったとか。夫婦愛の深さがしのべれます。今、お子さんは独立し、状況は変わりましたが、余震が続く中、「足手まといの私のことは置いて逃げてほしいと思っています。決して恨んだりはしないと誓って言えます」と胸の内を明かします。

東京都八王子市の主婦、竹田藤子さん（58）は、Q&Aに掲載された「福祉避難所が被災地などに約40か所」という記事への感想を送ってくれました。

福祉避難所は、被災した高齢者、障害者、妊婦が避難生活を送る避難所で、災害時に、福祉施設や一般の避難所の一角に設置されます。仙台市は事前に多くの福祉施設と福祉避難所設置の協定を結んでいたため、スムーズに開設することができました。竹田さんは、自分の住む地域ではどうだろう、と、八王子市役所の担当課に聞いたところ、「障害者のための特別支援学校など約50か所の施設と、福祉避難所設置の協定を結んでいる」との答えでした。知的障害のお子さんを持つ竹田さんもこれには一役買っていて、特別支援学校のPTA会長をしていた時に、福祉避難所の整備を市議に働きかけたそうです。

「今では、学校に、毛布や水、食料などの備蓄もあるという。あの頃はこんな大震災が起こるなど考えもしなかったが、PTAとして運動してよかったと思う。障害のある子どもの親が少しでも安心してくれたらうれしい」と締めくくります。

連載「被災地から得たもの」 県災害ボランティア隊 日本海新聞 2011年5月3日
がれきの山と化した町の中。隊員たちは惨状を目の当たりにしながら作業に取り組んだ＝4月19日、宮城県石巻市内（県提供）



鳥取県社会福祉協議会に一般登録し、これまで4月上旬から2度にわたって東日本大震災の被災地で支援活動に当たった「県災害ボランティア隊」。隊は宮城県石巻市内で家屋や商店などの泥出しや清掃、がれきの撤去などを繰り返した。隊長の県社協職員、岸本照之さん（53）は「鳥取にいても、被災地への支援の思いだけは途切れさせないようにしたい」と語る。

■調整に奔走

岸本さんは鳥取市消防団に21年間所属。阪神大震災当時も県社協の地域福祉課でボランティア派遣の調整役を務め、現地にも実際に赴いた。「自分が適任かは分からないが、(ボランティア)志願者の熱い思いにも答えられるように」と隊長の任を引き受けた。

被災地に広がっていたのは泥にまみれ、がれきであふれた街。目を疑いたくなる光景に、胸が締め付けられたという。

現地では隊長として、ボランティアセンターから寄せられるニーズを中心に班編成や道具の手配など調整業務に奔走。ニーズを待つだけでなく周辺への聞き込みなど能動的な“ニーズ発掘”にも取り組んだ。活動経過がつづられた文字で真っ黒に埋まったノートを手にとり「隊員の安全確保や被災地への配慮のために規律を考え、隊員にとっては厳しかった面もあったかもしれない」と振り返る。

■一步一步前進

派遣回数を重ねたことで被災地のイメージは湧き、「作業もぼんやりしていたものから明確になってきた」と岸本さん。2次派遣の際には、がれきの撤去も進み歩道も確保され始め、現地入りするボランティア隊も増えた。道具の共有も可能になり、作業も効率的になった。復興へ一步一步進んでいることを実感している。

第3次派遣も検討されるが「5月の連休中や週末などは多数のボランティア団体が現地入りする」とし、「それ以外の平日の支援や継続した息の長い支援が重要になるのでは」と指摘する。

東北地方の一部のボランティアセンターでは、ボランティアが供給過剰に陥っていることもあり「まずは現地ニーズを把握したい」と見据える。

作業していた石巻市内で、商店街の住民から言われた感謝の言葉が忘れられない。「商売の再開をあきらめかけていたが、ボランティアが頑張ってくれる姿を見て、再開に頑張ってみよう」

連載「被災地から得たもの」 湯梨浜町の保健師

日本海新聞 2011年5月4日

安否確認などのメモがびっしりと貼られた避難所のボード

鳥取県湯梨浜町子育て支援課の保健師、大田幸子さん（47）は町で4人のチームを組み、3月27日から4月2日まで宮城県石巻市の避難所に入った。突然の大災害に見舞われ、避難所暮らしを余儀なくされた人たちの”心と体”を気遣いながら一人一人と向かい合った。



■聞くことが大事

「遺体確認はどこまでしてくれるのだろうか」「最終的に遺体には会えないのだろうか」。家族を亡くした被災者が不安や苦しい胸の内を訴える。その訴えに大田さんはじっと耳を傾けた。

「家族と死別した人が、（悲しみを）受け止めて乗り越えていくのには時間がかかる。体験を聞いてあげることで、気持ちの整理を後押しできればいい。しっかり話を聞くことで、その後の対応も見えてくる」と話す。

■いかに健康を維持するか

避難所生活は、高齢者にとって特に厳しいものだった。避難所の体育館には洋式トイレがないため、足を折り曲げて腰をかかめる和式トイレを利用するしかないが、足腰が弱った高齢者には苦痛が大きい。トイレに行く回数を減らそうと水を控える人もおり、脱水症やぼうこう炎などの健康問題が心配された。

厳しい環境の中で、高齢者の健康をどう維持するか。大田さんは血圧の測定などをしながら「睡眠はとれる？ 困ったことはない？」と声を掛け、被災者の健康状態を把握するよう努めた。

■どう備える

鳥取県で災害が起こった時はどうするか、についてもあらためて考えた。避難所になる体育館などに洋式トイレは整備してあるか。高齢者など避難所に自分で行けない人をどう支援するか—など行政や地域が考えておくべき課題は多い。

行政や地域だけでなく、住民一人一人の備えも重要だ。大田さんも、こう話す。「日中に災害が起きた場合、夜の場合など、その時々で、どういう行動をとるか、家族で話をしておくことが大切。津波で薬が流されてしまった人もいた。防災グッズの中に必要な薬や医療品、緊急連絡先、主治医、既往症などが分かるものを入れておいてほしい」

連載「被災地から得たもの」 精神保健福祉士 広江さん

日本海新聞 2011年5月5日

被災地で心のケアと災害時要援護者の支援の大切さを実感したという広江さん＝米子市内

社会福祉法人養和会の障害福祉サービス事業所、F&Y境港（境港市中野町）の所長で精神保健福祉士の広江仁さん（45）は、心のケアや支援活動の準備のために、3月と4月の2回、被災地入りした。

被災者の声にじっくりと耳を傾ける傾聴を基本とした支援を通



して感じたのは、高齢者や障害者といった災害時要援護者への対応の大切さ。「要援護者は災害時に弱い立場。災害に備え、障害者ら当事者も交えた防災計画の見直しを」と訴える。

■心に寄り添う

精神保健福祉士は、精神科医療機関などを活動の場に、精神障害がある人の社会参加支援のほか、医療や生活に関わる悩みの解決を手助けする国家資格。日頃から多くの人の心に寄り添う。

被災地支援は、日本精神保健福祉士協会としての活動。広江さんを委員長に同協会内で災害時に何ができるのか検討した成果を生かし、全国の精神保健福祉士が支援活動をする準備のために3月23～25日と4月18～23日、岩手、宮城、福島各県を回って現地の要望を聞き取った。

中でも、地震と津波の被害に加えて福島第1原発の事故によって一時、屋内退避区域となった30キロ圏内の福島県南相馬市の状況は深刻。「30キロ圏内ということで支援の手が届いていなかった」。子どもがいる家庭など多くの市民が他の場所に避難していたが、お年寄りたちが避難所に取り残されていたという。

現地では医療チームも活動していたが、多忙を極め、被災者の話をじっくりと聴く時間がない。「われわれこころのケアチームは医療チームと連携しながら1時間でも時間を掛けてつらい気持ちや怒り、不安を聴き、解決のお手伝いをした」と話し、「原発の問題で先行きは不透明。心のケアは重要性を増している」と強調する。

■官民で人材確保を

心のケアの必要性は被災者だけにとどまらない。「行政職員や避難所の責任者も疲弊している。責任者は自分を差し置いて他の避難者を気遣い、心情を打ち明けるのを遠慮している」。現在も養和会の精神保健福祉士を派遣するなど支援を継続している。

被災地で実感したのは、災害に備える意識と行動の大切さだ。以前携わったある市の防災計画の点検、見直しでは、行政職員だけでなく災害時要援護の当事者側も交えて作業をしていたといい、「避難所に指定されている体育館に灯油の備えがないといった事態が起きないためにも、災害前に検証しなくては」と気を引き締める。

今後の課題については「医療と同様に重要な心のケアをできる人材を確保できるか。行政は民間の協力を得ていつでも心のケアができる支援態勢を整えておく必要がある」と提言する。

ボランティア 善意の波 調整悩む —刻む その時に備え 食べきれない炊き出し 平時からの連携が課題

読売新聞 2011年5月4日

大槌町での活動をパネルにして展示している高橋洋介さん



東日本大震災の発生から1か月後。三重県桑名市社会福祉協議会の高橋洋介さん（29）は、岩手県大槌町のボランティアセンターにいた。被災地の各地にセンターが設置され、ボランティアの受け入れが本格化し始めた頃だった。

「同じ避難所で別のボランティアが炊き出しをしています」。高橋さんはボランティアが効率的に活動できるよう調整するコーディネーター。避難所に派遣したボランティアから何度も電話が入った。

避難所に出向くと、被災者は「こんなにたくさん炊き出しがあっても」と戸惑っていた。センターを介さずに活動するボランティアに、「他にも困っているところがあるので、そちらに行ってもらえるとありがたい」と丁重に頭を下げた。「善意を無にすることなく、活動力のある人には協力してもらわないと」

被災者のニーズを把握できなかつたり、ボランティアをさばき切れなかつたりしている

地域もある。被害が大きく、広域から多くのボランティアが集まるほど、センターの運営は難しくなる。「自治体やNPO、住民らと日頃から話し合い、役割分担しておく必要がある」と課題を挙げながらも、「ボランティアの果たす役割の大きさを実感した」と力を込めた。



菅沼良平さん

障害者を支援する「AJU自立の家」(名古屋市昭和区)は、宮城県名取市の障害者支援団体からの要請を受け、発生翌日に同市へ向かった。周辺の避難所も回り、多くの人が不自由な生活を強いられている実態を目にした。避難所で話を聞くと、プライバシーがないことに困惑する声が目立った。自立の家で防災を担当する菅沼良平さん(60)らは「自分たちが作っている間仕切りが必要とされている」



と思った。

自立の家では以前から防災用品として、布製接着テープで様々に組み合わせることのできる強化段ボール製の間仕切りを自治体などに納入していた。発生当時は在庫がなかったため、これまでに納入した自治体から借りる形で被災地に運んだ。

これまでに、宮城、岩手県内の避難所12か所へ約2400枚の間仕切りを持っていった。ボランティアセンターからの指示などはなかったが、菅沼さんは「センターを通しては間に合わない。初動の時に自分たちで適切に判断して動けるボランティアを育てる必要がある」と指摘する。

道山貴和子さん

4月中旬、宮城県七ヶ浜町で足湯と炊き出しを行った名古屋学院大学3年の道山貴和子さん(20)は、防災NPO「レスキューストックヤード」(名古屋市東区)のボランティアに申し込んで、被災地に入った。



3月29日に語学留学していたニュージーランドから戻ったばかり。2月にクライストチャーチで地震に遭い、地震の怖さを体験した。東日本大震災のニュースを見て、「何かしたい」という思いに突き動かされた。

被災地では住宅の片付けも手伝った。住んでいた年配の女性から、「自分よりひどい被害を受けた人も多く、自分のことを話すのがはばかられた。話し相手になってくれてありがとう」と感謝された。

被災地の長期的な支援と自分たちの身に降りかかるかも知れない災害に備え、災害ボランティアサークルの設立に向けて準備している。「被災地に行き、いくら人手があっても足りないことを知った。私たちが助けを必要とする時のためにも、支え合いの輪を広げたい」

アンパンマンから日本人へ「なんのために生まれて生きるのか」

ニュースポストセブン 2011年5月2日



【やなせたかし氏】

いま、被災地を駆け抜ける一陣の風がある。アニメソング『アンパンマンのマーチ』だ。震災直後にラジオで流されるやrikエストが殺到、動画サイト「YouTube」でも総再生回数は1300万回近くにも及ぶ。「深く染みて、目の奥がじんわりしました」「この曲の深さが伝わってきます」「生きることのメッセージが伝わってくる」。人々を勇気づけるこの歌はどのように誕生したのか、どのような想いが込められているのか。自ら作詞を手がけた「アンパンマン」作者で今年92歳、漫画界の大御所やなせたかし氏に、ノンフィクション・ライターの神田憲行氏が聞いた。

* * *

——「アンパンマンのマーチ」が被災地などで大変な人気を集めています。作者としてどのような感想をお持ちですか。

やなせ：僕のところにも「被災地でラジオから流れ出した曲に合わせて子ども達が一斉に歌い出した」とか、いろんな反応が届いています。まさかこういう状況の中で歌われるとは、と驚いています。「アンパンマンのマーチ」はいつもアニソン（アニメソング）の人気投票では10番目くらいなんだよね。それがなぜ震災後に人気が出てきたかという、「アンパンマン」自体が「人を助ける話」だからだと思う。一種の救援ソングなんだ。子どもたちを励ますことが出来て、とても嬉しいですよ。

——改めて聞いてみると、歌詞の内容も深いですね。とても子ども向けの歌とは思えません。

やなせ：そうそう（笑）。23年前に「アンパンマン」のテレビ放送が始まる時に僕がこの詩を書いたら、「子ども番組にしては難しすぎる」とテレビ局の人にいわれたんだ。でもどうしてもこの詩で行きたかったので押ししました。

歌はさきに三木たかしさんの曲が出来たんです。テープに吹き込まれた三木さんの鼻歌みたいなのを何度も繰り返して聞いているうちに、頭の中にパッと「だから君が行くんだ」という歌詞が浮かんだ。詩の最初から順番に浮かぶのではなく、ワンフレーズだけ最初に出てきたんです。僕の作詞はいつもそうなんです（注・やなせ氏は名曲『手のひらを太陽に』の作詞家でもある）。

「なんのため生まれてなにをして生きるのか」という歌詞は、当時、大学を出ても何をしたらいいのかわからない無気力な学生が増えていると聞いたので、子どものころから「何のため人は生きるのか」しっかり頭に叩き込んでおかななくてはいけないと思い、付け加えました。哲学的な意味があるので高校生や大学の先生からも「感動しました」とお手紙をもらったことがあります。

——確かに哲学的な示唆に富むフレーズが多いですね。

やなせ：「胸の傷が痛んでも」もね。これはアンパンというヒーローは他のアニメのヒーローと違い、いつも傷つくからなんです。バイキンマンに押しつぶされたりして、ジャムおじさんに「助けて」と弱音も吐いたりする。でも作り直してもらおうとまた元気に飛び立っていく。そのアンパンが負う傷の全てを「胸の傷」で代表させました。苦しくても傷ついても、ヒーローは人を助けるために飛び立つのです。

僕は物語を作るときも、歌を作るときも、子ども向け・大人向けとか区別していません。子どもも大人も一緒に感動しなくちゃいけない。だから歌詞が子ども向けにしては難しいと指摘されるのかも知れませんが。

——なぜ今回、子どもだけでなく大人の胸も揺さぶったのでしょうか。

やなせ：わかりません……作者でも。僕はそのときそのとき感じていたことを詩や漫画にしているだけなんです。 「アンパンマン」も最初の童話は、大変評判が悪かった。なにしろボロボロのマントをきて、自分の顔を食べさせるヒーローなんかそれまでいないんだから（笑）。出版社の人からは「このような作品はこれきりにしてくださいね」と念押しされるし、絵本の批評家からは「こんな低俗な本は図書館に置くべきではない」とまで言われました。それが読む人の輪がだんだんと広がって行って、あれだけ人気のある作品にまで育った。「アンパンマンのマーチ」にしても、どのような思いを込めて聞くのか、聞く人の自由なんだと思います。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行